

“ Gain all you can, Save all you can, and Give all you can ! ”  
(John Wesley)

## 畑 道 也

関西学院の創立者ウォルター・ラッセル・ランバス（1854-1921）は、北米の南メソジスト監督教会の宣教師でした。日本がようやく鎖国の眠りから覚めようとしていた19世紀の前半、北米には三つのメソジスト教会が存在していました。まず米国メソジスト監督教会、そして南北戦争を機にそこから分離した米国南メソジスト監督教会、それにカナダメソジスト教会です。19世紀は伝道の世紀ともいわれています。なかでも北米のメソジスト三教会は、熱い祈りをもって海外へ宣教師を派遣し、それぞれ日本にも宣教部を設けて教会、学校、奉仕活動を展開したのでした。

メソジスト教会の歴史は、英国国教会のジョン・ウエスレー（1703-1791）に指導されたオックスフォードの学生有志によるホーリークラブ（神聖クラブ）にまでさかのぼります。このサークルは、ウエスレーが母スザンナから受けた厳格で信仰的な生活規範を互いに守ることを目的とするサークルで、祈り、学業、奉仕などの厳しい日課を定め、互いに励まし合いつつ各々の信仰生活を確認していこうという運動でした。このホーリークラブのメンバーがあまりにも几帳面に日課を守り、自らの生活をきっちりと律していたことから、周りの人たちはある種の皮肉を込めて彼らにメソジスト（Methodist）  
几帳面屋・きっちり派 というニックネームをつけました。

当時の英国では産業革命が進行中で農業社会から工業社会への移行期にあたり、農村を離れて都市や炭坑などに流れ込んだ貧困層がその日暮らしのすさんだ生活に苦しんでおり、非行、犯罪などの社会不安もつのっていました。こうした社会情勢の中で、厳格な信仰生活と幅広い奉仕に献身するメソジストたちは、注目すべき存在となっていたのです。

そして英国のブリストルの街で始められたウエスレーの野外説教は、毎回数千人の聴衆に熱烈に迎えられたため、彼は各地に野外説教の輪を拡げ、馬や徒歩で町々をめぐり、その日暮らしで荒んでいく人々の心に信仰の灯をともし、生活の規律改善を指導して歩き、貧しい人々のための学校や福祉施設

の設立に奔走しました。生涯を通じて彼が旅行した距離は約35万キロ、50年間に4万回を超える説教をしたと伝えられています。こうして地域ごとにメソジスト会という組織が作られ、その集会・礼拝施設は家のない人たちの宿泊所ともなり、そこに住む人たちは皆ひとつの家族として食事を共にしたのでした。またウエスレーたちは炭坑で働く貧しい坑夫の子供たちのために学校を建て、ホームレスの人たちのために無料の診療所を作りました。

そして1786年のアメリカ合衆国の独立によって、まずこの新大陸アメリカのメソジスト会が英国国教会から独立し、ウエスレー没後の1797年には英国のメソジスト会も独立したメソジスト教会となりました。

こうしてメソジスト教会はウエスレーの「世界はわが教区」との信念を受け継ぎ、まず北米大陸で飛躍的な展開をとげ、さらにアフリカやアジアの諸地域に向かって活発な伝道活動を展開していきました。その活動は単なるキリスト教の教理の伝道に止まらず、教育に福祉に、あるいはさまざまな社会活動にと、「キリストの愛に日々共に生きる運動」として展開されていったのでした。したがってランバスによる関西学院の創立も決して個人の企てによるものではなく、ウエスレーの流れを汲む教会のミッション（使命）を遂行するためであったのです。きっと学院の皆さんは、ウエスレーの提唱した「大いに獲得し、大いに節約し、大いに捧げなさい」という言葉と、学院のモットー「マスタリー・フォア・サービス」の意味が似かよっていることに気がつくことでしょう。

関西学院創立の二年後にアメリカに帰国したランバスは、1910年にメソジスト教会の最高の職位である監督（ビショップ）に推挙され、神の福音の伝道に従事するビショップとして、中国、日本、韓国などアジア（6回）をはじめブラジル（6回）、アフリカ（2回）、メキシコ（16回）、キューバ（18回）、そしてベルギー、ポーランド、チェコ、フランスなどヨーロッパ、さらにはシベリアへと倦むことなく伝道活動に邁進し、1921年、さらなる世界伝道のためシベリアから中国、朝鮮を回り、日本を再訪して横浜で病没しました。その最後の言葉は、“I shall be constantly watching”でした。

（院長）